

No. 9

Jan. 2005

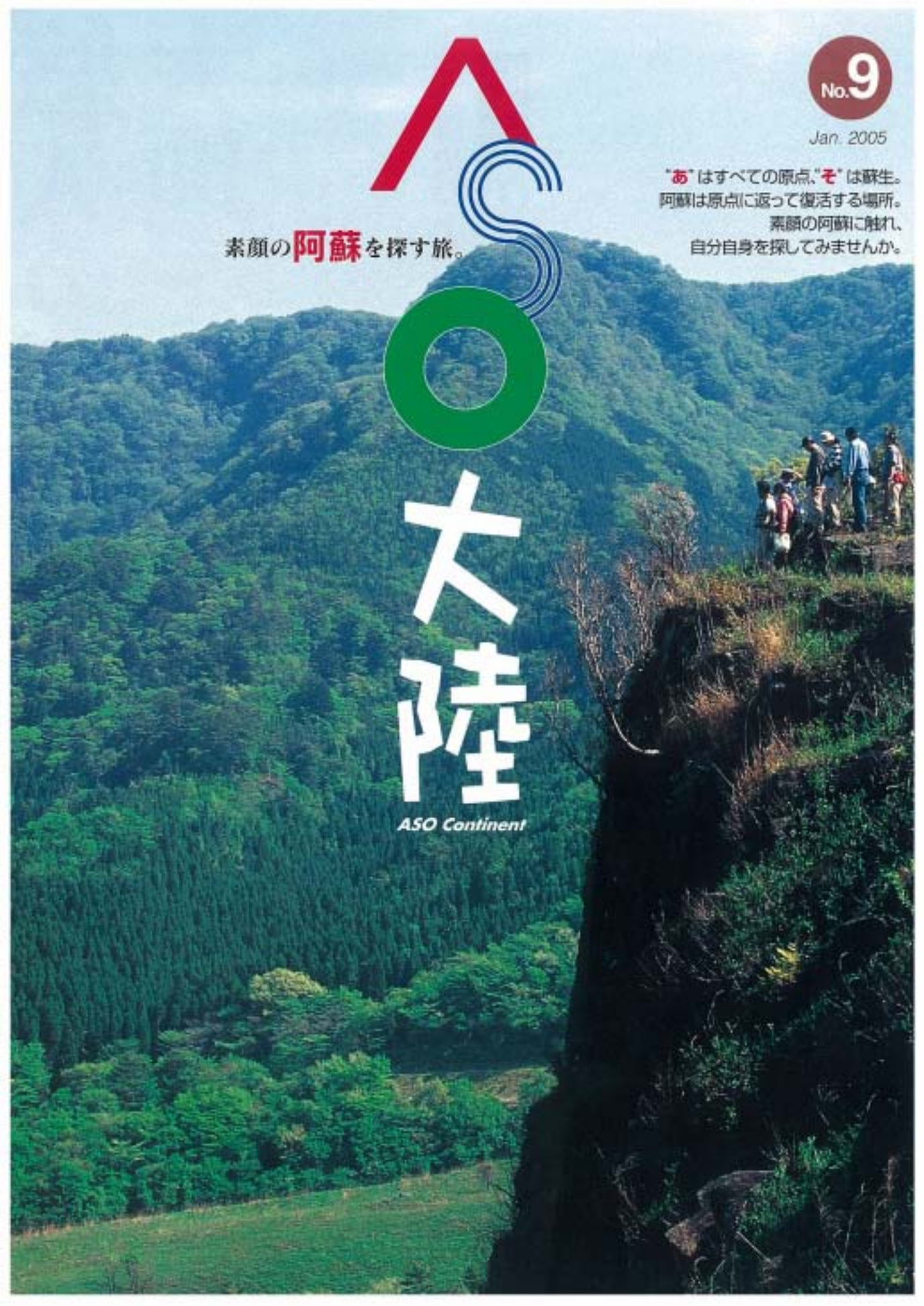
“あ”はすべての原点、“そ”は蘇生。  
阿蘇は原点に返って復活する場所。  
素顔の阿蘇に触れ、  
自分自身を探してみませんか。

素顔の**阿蘇**を探す旅。



# 大陸

ASO Continent





# 悠久の阿蘇の 大地を歩く

トレッキング特集



阿蘇といえば、草原の連なり、牛たち。しかし、それだけではない。原野に足を踏み入れ、外輪山を回り、火口まで歩くと、思いがけず優しい溪流や原生林、ダイナミックな火山活動の軌跡に出会うことができる。今まで知らなかった阿蘇は、歩くことで初めてその姿を現してくれるのだ。今回は、ありのままの自然道を生かしたコースづくりをすれば、世界に誇るトレッキングコースとなるであろう3コースを試験的に案内する。

**中阿蘇火口トレッキング** 所要時間：3時間～5時間（コースによって異なる）

## 阿蘇の鼓動に耳を澄ます

そこはかたなく伝わる地動、視界をさえぎる白煙、27万年の時を経てもなお続けられている大地の営み。阿蘇の全てを生み出したエネルギーの源に、今立ち入る。



阿蘇火口群のダイナミックな景観はまさに「東洋のグランドキャニオン」



仙酔峡ロープウェイ乗り場から片道9分、登山道入り口である火口東原に向かって標高1280mの高さまでロープウェイで上る。標高差およそ380mといわれるこの区間は、50分かけて上る歩道も用意されている。山上に着くと何となく息苦しい。二酸化硫黄のためです。気管支や心臓が弱い方は吸わない方がいいですと、説明をされたのは、京都大学火山研究所の中坊眞さん。大自然の猛烈な呼吸に思わずタオルを口に当てる。

誰もが目を惹かれる翡翠色の湯だまりに、限りなく黒に近い灰色の砂千歩、その向こうに見える青々とした鳥帽子岳や草千里。自然がつくり出した壮大な色の重なりは、まるで見る者の目を意識しているかのようである。

うだ。歩き始めてから15分程でたどり着く、火口東原所からの眺めである。

中岳山頂へと向かう道のりに、火山灰や火山砂が幾重にも重なった地層があった。ここは、火山灰が土になる間もないほどに、火山活動が盛んだったことの証なんです。火山活動が比較的穏やかだった時には、火山灰が風化して粘土状の黒っぽい土になっているから、触ればその違いがわかりますよ。阿蘇火山博物館館長で阿蘇自然案内人協会の池辺伸一郎さんのわかりやすい解説を耳に、火山の過去の経歴を目と手で確かめる。近くには、火山弾が衝突して出来たクレーターも見受けられた。破壊と再生を繰り返してきた、火山の凄まじいパワーの形跡



火口壁の細い地層は噴火時、横裂りの火砕流が流れることで形成された

標高1500mの中岳山頂に到着。そこから阿蘇の火口列が一望できた。南北15キロに延びる火口列には、クレーク（割れ目）があるのでマグマがしみ出ているんです。中坊さんの説明が続く。岩石がゴロゴロと横たわっている中を歩くこと約35分、やっと目的地の高岳山頂に到着した。あたりを見渡しても植物が見当たらない。鳥帽子岳、袴岳、括は同じくらいの高さでも植物が自生しているが、どうやら硫黄の関係で、火口付近には植物が生えないようだ。

地元の人は、高岳のことを「ひこくに二ひこのくに」と呼ぶ。何のことだろうと思えば、高岳山頂の標高が1592mだからである。阿蘇五岳で一番のっぺの高岳の身長と肥後の國とを掛け合わせているのだ。

そう思えば、肥後の國の人々の生活も高岳に見守られている感じがする。その後、高岳から中岳、中岳から砂千里へと続く尾根を下る。切り立つ岩肌や、透き通るような湯だまりを見ながら、火山灰が埋め尽くす砂千里に足を踏み入れる。黒みがかった大きい粒の砂地をサクサクと歩く。ここは、かの有名な黒沢繁信が映画のロケ地として訪れた場所でもあるようだ。

仙酔峡ロープウェイから火口東原展望所、中岳、高岳、そして砂千里までを辿った中阿蘇火口トレッキングは、およそ4時間半の道のりであった。私達が常日頃、不動と信じて疑わない大地が、他ならぬ「生きもの」であることを教えてくれる火口。そこには、この美しい阿蘇の全てを創り出した、最初の姿がある。

中岳山頂へ向かう途中の道は、黒の道を連想させる







深奥のせせらぎに誘われて草原を下る



九州三大河川と称される筑後川の源流にあたるこの渓流には、実は名前がない。地図上にも記されていない。この場所は、入会地内にあるため、地元の牧野組合の人々以外には自由に行き来ができない。しかし逆に、そんな場所だからこそ、手付かずの自然が残されている。人の出入りが制限されるこの地であるが、もちろん牛達は例外である。その証拠に溪谷までの道のりには、ちゃんと牛道と裏があった。見渡す限りの草原で思う存分草を食んだ後、鞍を漕しにゆつくりゆつくりと下りて来ているのだろう。

水際で楽しんだ後は、また再び草原の方へと上って行く。草原といえは、その壮大な景観ばかりに気をとられがちだが、ちよつと足元に目を向けてみるのも面白い。ここ阿蘇には、専門家が注目するほど、種々の植物が混生している。梅鉢の紋に似た小さくて白い花をつける梅鉢草(うめばちそう)や一本当に、らつきょうの味がする「ト実証済みの紫色の山ラッキョウ。他の野草の間から慎ましやかにその首を覗かせるリンドウも、阿蘇の自然は、これら小さき命たちの集まりから成り立っている。

清冽な川の流れると、雄大な草原を歩かせる北外輪トレッキングコース。日々の喧騒から少し離れると、五感を感じるには、自然からのメッセージを敏感にキャッチできる気がする。



「この葉の裏のついたのは、ムラサキシキブと言うんです」

上を通り過ぎる風は、何かの湧出のように、時折木々を揺らすつては葉っぱを落とす。その葉っぱは、自然が作り出した川底の幾層もの襍居に、挟まったり、引っ掛かったりしながら色を帯びていくのである。さながら、自然の推し出す絵巻といったところだろうか。



# 北阿蘇外輪トレッキング 草原の谷あい、 溪流のせせらぎを歩く――。

所要時間:3時間

季節ごとの木々の装い、サラサラと流れる清冽な水。阿蘇の自然に抱かれる静かな時が流れる。



曲む山アジの葉は驚くほど大きい

山田東部牧場から川のせせらぎの間へ下って下っていったところ。その渓流は、枝葉からこぼれる柔らかい陽光に包まれながら、そつと水面に石を入れてみる。あれっ、石はとどろく。思われる川底は、思われるほど浅い。巨木を確保した後に川上の方へと頭を上げる。なるほど、段々にとつとも大きく緩やかな石の階段が続いている。川底には自生するアケビやヤマアジの葉をつたいながら、巨大な石段を何歩もかけて上がっていく。その歩みは、流れに逆らいつつも、どこか阿蘇の自然に導かれているような印象を受ける。

ここは浅瀬で流れが速いため、岩面には苔がほとんどなく、長靴を履いていけば、初心者でも気軽に川中を歩ける。だが、油断は大敵。周りの光景に見惚れてばかりいると、パンヤンと深みにはまる。こころから注意。大自然の道は、都会のアスファルトの上とは事情が違ふ。古(いにしえ)より一時も休むことなく流れ続ける水たちは、滑りが滑え固まって出来た強固な岩肌にも時を刻んでゆく。ザワザワ、順







# ASO Design Center Information

(財)阿蘇地域振興デザインセンターは阿蘇郡12町村の地域振興、観光振興、環境・景観保全、情報発信を行っています。

## イベント情報

### 「冬の阿蘇」今だけキャンペーン



阿蘇町一の一宮町・波野村の合併を記念した広域キャンペーン。厳冬期にしか見られない凍る滝「古閑の滝」の芸術的な美しさを楽しむツアーや豪華賞品が当たるスタンラリーなどのほか、期間限定のさまざまな特典をご用意しています。  
 期間●1月5日(水)～3月30日(水)  
 場所●阿蘇町一の一宮町・波野村各所  
 お問い合わせ●阿蘇インフォメーションセンター  
 TEL0967-32-1980

### 九州山地神楽祭り

蘇陽町、長陽村、高千穂町、五ヶ瀬町の神楽保存会による神楽の競演。日常の慣しさをしばし忘れ、華やかな装束に身をまかせ、舞うひと時。  
 期間●1月29日(土) 18:30  
 開演場所●蘇陽町総合行政センター  
 お問い合わせ●蘇陽町企画観光課  
 TEL0967-83-1111



### 節分祭(ゴマ木まき)

阿蘇神社の節分祭は、祈禱殿の中央の茅で作った葦藁の中に悪鬼邪神を封じ込めるところが特徴的です。神事後まかれるゴマ木を持ち帰って焚き、その火にあたるとうまく息災といわれています。  
 期間●2月3日(木) 17:00～18:00  
 場所●阿蘇神社  
 お問い合わせ●阿蘇神社  
 TEL0967-22-0064



### 新酒とふるさとの味祭り



高森町の飲食店で期間限定の「れいざん」の新酒と高森田楽を始めとする郷土の味を堪能できます。オープニングの2月12日(土)には立野より高森までの両阿蘇鉄道内で新酒を飲みます。各種イベントも盛りだくさん!  
 期間●2月12日(土)から3月13日(日)  
 場所●両阿蘇鉄道内及び高森一帯  
 お問い合わせ●高森町観光協会  
 TEL0967-62-2233

### 冬あかり

2500個の手づくりキャンドルに火が灯り、幻想的でロマンチックな冬の西原が映し出されます。  
 期間●2月5日(土)・6日(日)  
 場所●西原公園及び周辺  
 お問い合わせ●西原村農工会 TEL096-279-2295



## トレッキングは

### 『案内人協会にお任せ!』

阿蘇にまつわる人々の営みの歴史から阿蘇の自然や動植物のことまで、愛情たっぷりに楽しく語ってくれる「阿蘇自然案内人協会」。現在約40人のメンバーが阿蘇の素顔に触れながら阿蘇トレッキングをより深く、より感動的なものにしていきます。今回はその中から3人のメンバーをご紹介します。



いせべしんいちろう  
 中阿蘇外輪トレッキング 池辺伸一郎  
 阿蘇の火山活動の歴史と研究成果を展示・発表する「阿蘇火山博物館」館長。「阿蘇はいつ噴火が起ってもおかしくないんですよ」とのこと。トレッキング用のシューズが必須。



ふるさとりんせい  
 南阿蘇外輪トレッキング 吉澤順正  
 南阿蘇山の麓、久木野村に生まれ育つ。小さな頃から南阿蘇山に遊び、楽しみ、植物や動物、歴史を学ぶ。現在、農林と木工に従事するが、多摩山脈をはじめとした南阿蘇山のトレッキングコース作りも行っている。



あさごろうお  
 北阿蘇外輪トレッキング 湯浅隆雄  
 自然保護の観点から野に咲く花や阿蘇の歴史を調べ始めて52年。北阿蘇山阿蘇は湯浅さんの知らない所はないけど、歩き回った場所。「花の匂いや、木の匂いは阿蘇でちょっと物足りない」

阿蘇自然案内人協会へのお問い合わせ・お申込み

阿蘇地域振興デザインセンター  
 TEL0967-22-4801